
Silent God

清水綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i l e n t G o d

【Nコード】

N 6 4 8 7 V

【作者名】

清水綾

【あらすじ】

今は忘れられた世界、ファーストロベル。全ては不確かな物のうえに成り立っているが、それら全てが否定されることは決してない。修道女リースはそんな世界に違和感を覚えながらも、平和な日々を送り続けていた。しかし、そんな彼女の前に一人の悪魔が現れる。彼は善なのか、それとも悪なのか。それすら分からないまま、彼女は世界が包括する不条理な闇に巻き込まれてゆく……。

莫大な闇に真摯に向き合うひとりの少女の、物寂しく切ない、長編異世界ファンタジー。

神様、沈黙しつづける私たちの神様。

私は貴方を恨みます。

なぜ彼に苦しい運命を背負わせたのでしょうか。

どうして彼でなくてはいけなかったのでしょうか。

彼はあまりに無力で、心優しい一人の青年でした。

己の運命にすら逆らうことも呪うこともできない悲しい存在でした。

どうして彼に苦しい運命を背負わせたのでしょうか。

神様、沈黙しつづけるこの世界の神様。

それでも私は貴方に感謝しています。

彼と過ごした日々は何物にも代え難いほどに美しく、優しかったから。

彼と出会えたこの運命に。与えてくださった貴方に。

——そして出逢えた貴方に、私は感謝します。

——くそつ。あの上司め！

ルフィス・ユイジーンは今にも爆発しそうな怒りを、ひたすら足を動かすことで発散していた。時刻は既に零時を過ぎている。人通りの少ない住宅は静かなもので、聴こえるといえば酔っ払いの調子外れな鼻歌くらい、それすら今は気に入らなかった。ついていない。いざ帰ろうというときになって、出張しがちな上司が珍しく戻ってきていた。いつも以上に不機嫌な顔で——。

それからは散々だった。拒否権なんて最初から存在しない下っ端たちはもちろんのこと、定時帰宅を約束されたはずの自分たちですら残業、残業、残業……。ようやく帰れるようになった頃には太陽が昇り、天を仰ぎ、ふたたび沈んでいた。溜息も出るというものだ。そもそも何故、上司は怒っていたのか。

「敵の足取りがつかめなかったのかな」

いま、上司はある連続殺人犯を追っている。

行く先々で多数の人を切り裂き、殺している悪魔のような男。彼の初犯はあまりに惨く、ルフィスの記憶に焼きついている。長きに渡り彼を匿ってくれた村を、彼自身が滅ぼしたのだ。男はもちろん、女も、子供も、老人も、みんな惨殺した。何故、そんなことをするのか——理解に苦しむ。

外見はたしか宵闇のような黒髪にワインレッドの瞳。名は、たしか。

「うん？」

そのとき、微かに『何か』が聞こえた。

聞き違いだろうか。ルフィスが息を潜めて、耳を研ぎ澄ます。

ドン——

聞き違いではない。半ば無意識のうちに、ルフィスは駆け出した。微かに聴こえる程度だった音は足を進めるたびに鈍さを増してゆく。

それに混じって聴こえるのは、男の悲鳴――

「……知らな……俺は……何も……」

その声は、恐怖に震えていた。

知らない？ 男は、誰かに脅迫されているのか。

ルフィスは声を正確に捉えようと、何度も耳を澄ました。彼らの正確な位置が掴めない。恐らく迷路のような街路樹が、声の流れを歪めているのだろう。

「ノーマの……いる……一人だけ……生き残りが……」

耳だけでは頼りにならない。この近辺の地図を脳内に展開する。この時間帯に男たちが溜まりそうな場所は、ひとつしかない。突き当りの角を曲がり、家の僅かな隙間を抜ける。うっかり植木鉢を蹴飛ばしてしまったが、無視した。ああ、あとで上司にどやされそう
だ。

「名前は……リース・キャロル」

今度は、はっきりと聞こえた。

「そこか！」

裏路地の奥のさらに奥。人気の少ない酒屋の裏口に数人の男が倒れていた。嗅ぎ慣れた血の匂いもする。立っている人は一人も居ない。

「大丈夫ですか!？」

近場に居た一人の首下に手を当てると、ぬるりとした感触があった。満月に良く照らしてみると、その男は既に絶命していた。首の辺りから鋭利なナイフのようなもので、ザックリと斬られている。

一気に全身が冷える。上司や同僚から話は聞いていたが、実際に見るのは初めてだった。それでも騎士団としての義務感がルフィスを動かす。震える声で「だれか、居ないのか」と聞く。

「……助け、か？」

振り向くと、壁にもたれるように黒ずくめの男が蹲っている。駆け寄って、ルフィスはまた悲鳴をあげた。男の腹部には凶器と思われるダガーナイフが突き立てられていた。殴られて腫れた顔は痛々

しく、口からは赤い筋が垂れていた。危険な状態であるのは一目瞭然だ。

「喋らないで下さい。いま、人を呼びますから」

これは今すぐに医者と呼んだほうが良い。そう判断したルフィスは、まず酒場に行くべく立ち上がろうとした。しかし、彼の腕を男が掴む。

「すまない……言ってしまった……呪われた一族……を」

「黙って」

しかし、男は黙らなかった。つい腫れあがった顔ばかりが気になって気づかなかったが、彼の瞳は懸命に何かを伝えようとしている。おそらく死は覚悟の上だろう。

ルフィスは膝を折り、彼の口元に耳を当てた。

「東サンスベリア。……アリアの家という孤児院……に、リース・キャロル……という娘が……いる。彼女が……危険だ。……奴より先に……彼女の保護を……二人は出会っては……いけない」

「何故？ その女性を狙っているのは、だれですか？」

「お前も知っているはず……いま、巷を騒がしている連続殺人犯。

……黒髪……ワインレッドの瞳……名は」

その瞬間、世界の全ての音が消えた。

そんな馬鹿な、どうして奴の名が出るんだ。これは、自分の処理範囲を超えている。いや、そもそも自分が居ること事態が間違いなのだ。それでも自分はここに居る。ならば自分に何が出来る、希望はないのか、少しでも彼の言葉を記憶することが希望に繋がるのだろうか。

「二人が出会ったら、何が起こるのですか」

その声は、自分でも驚くほど震えていた。男は微かに笑うと、吐くように呟いた。

「……世界が、滅ぶ。だから」

——ソラン・マグナスとリース・キャロルは出逢ってはいけない。

漆黒の髪にワインレッドの瞳。ソラン・マグナス。

それは、上司がいま追っている連続殺人犯の名だった。

白い玉。ふわふわの綺麗な玉が、緩やかに落ちてくる。

後を追いかけるように二つ、三つ、四つと降ってくるそれら。右手だけ伸ばして掬いとると、ひんやりと冷たい。

「降ってきたわね」

傍らの修道女の言葉に、リースは無言でうなずいた。

リコリーの街はこの数日ですっかり冷え込み、空には分厚い雲が覆うようになった。茶色の屋根が印象的な明るい町だけど今日ばかりはどこか寒々しく、人の少ない道路はどこか心寂しく、街の全てが凍てついているようだった。

いつかこの日が来ることは分かっていた。だから習慣になるほど空を見上げて『はやく雪が降りますように』と祈りつづけた。いまもまさにその時だった。丸い雪玉。表面は硬いけれど、真っ白いそれは力を加えるだけで容易く崩れる脆さがある。素直に愛しい。可愛い。おかえり、いらっしやいと、言葉が次から次へと胸からあふれ出てきた。

「嬉しそうねえ、リースちゃん」

一瞬、呼吸を忘れた。感動するあまりすっかり忘れていたけど、傍らには小悪魔みたいな修道女——ナナリーがいたのだ。彼女の屈託のある笑顔で、リースは『いろいろ』と悟った。

「……そんなに変な顔だった？」

「ええ、もちろん」

しっかりと頷いた。彼女のまっすぐな金髪をゆらして。

「どのくらい？」

「かわいいお鼻の下が伸びていて、薔薇色の唇は緩んでいた。薄紅色の頬は熟れた林檎のように真っ赤で、まるでその姿は恋に恋する乙女のような清潔さと可憐さが」

「そ、そこまで緩んでないもん！」

恥ずかしさから、リースは声を張りあげてしまった。おかげでナナリーは黙ってくれたけど、それでも大きすぎた。ただでさえよく通る声に、ビックリした通行人がいつせいに彼女たちを見た。ナナリーとリースは何でもないと彼らに伝えようと、白い街を子犬のように逃げ出した。

その間もナナリーはどこか楽しそうだった。リースの意外な一面が見られたことがよほど嬉しいのだろう。そう思うと余計に恥ずかしくなった。

「ナナリーのバカ」

「ごめんごめん」

笑いながらも素直に謝るところをみると一応、反省はしているみたいだ。でも、悪戯好きの彼女のことだから、油断できない。気を引き締めていこう。

——しかし、それはそれ。これはこれ。リースは含みのある笑みを浮かべると、抱えた紙袋の中から蜘蛛のミニチュアを取り出した。全身は真っ黒い蜘蛛で、胴体だけは黄色のボーダーになっており、全身のあちこちから細かい髭が生えていた。はつきり言って、かなり気持ちわるい。

跳ねる心臓を抑えながらナナリーの修道服の袖に蜘蛛を引っ掛けると、淡々と彼女に語りかけた。

「ナナリー。服の袖に蜘蛛がついているよ」

ちよっとした悪戯。それでも効果は絶大だったようだ。

「きゃああ！」

ナナリーの悲鳴をあげ、半ば泣き顔になりながら蜘蛛を落とそうと右腕を振った。

その勢いで蜘蛛のミニチュアも落ちたのは、まあ、予想通りだった。しかし、その際に玉葱まで落ちてしまった。二人とも両手が塞がっているので止めようがなく、下り坂を玉葱がころころ転がってゆく。そしてふもとのポールにぶつかってようやく止まった。

ナナリーが青い瞳を吊り上げて、リースを睨む。

「覚えてなさい！」

うん、それだと悪役の捨て台詞だからね。ナナリー。思わず口から出てしまいそうなのを堪えながら、とりあえずやり過ぎたことを反省する。そして数歩遅れて玉葱を追うべく、雪で滑りやすくなった石畳の坂を駆け下りた。もちろん、蜘蛛のミニチュアは忘れない。

視線を玉葱へと移すと脇道から現れた黒服の女が、ちょうどそれを拾っているところだった。

「すみませーん！ それ、私たちのなんです！」

ナナリーが声を張り上げた。ふと、リースは強い違和感を覚えた。リースはリコリーの街に住んで長いが、あんな黒尽くめの女は見たことがなかった。それにあの脇道には、リースとナナリーが住む孤児院『アリアの家』しか無い。何だか嫌な予感がした。

そして、それは気のせいではなかった。ナナリーたちが近くまで行くと、女は目深に被った帽子を摘みあげてにこりと笑った。――恐らく、ナナリーに。

「こんにちは」

どこかの軍人だろうか、スーツの襟には銀のピンバッチを、腰のベルトには小ぶりの拳銃を装備している。ハスキーボイスのよく似合う、金髪碧眼の美しい女だった。――そして驚くほどナナリーによく似ていた。

「……どうして、ここに」

ナナリーの声は微かに震えていた。

「心配しなくても、ただの仕事よ」

「でもそっちには孤児院があるはずよ。あそこに何の用？」

「自惚れないことね。うちが貴女みたいな厄介者のために、こんな僻地へ来るわけないでしょう」

おそらくナナリーの反応を予想していたのだろう。あまりにも突き放した対応に、わずかにナナリーが怯んだ。白い顔はみるみるうちに蒼白になっていったが、青い瞳にはたしかな怒りがあった。

この顔をリースは知っている。この顔は――

「……貴方がリース・キャロルさんね」

「え？」

どうして私の名を？

「私は貴女とは初対面のはずですが？」

どういふことなの、と眼で訴えるリースに、黒尽くめの女は苦笑いを浮かべた。

「……ごめんなさい。急に現れて警戒する気持ちも分かるけれど、どうか落ち着いて。私の名前は、ミランダ・ガーディナー。ここへは大聖堂の使者として来ているわ。ひとまず教会へ戻ってマザーと一緒にお話しましょう。ここで立ち話をしていたら、みんな風邪をひいてしまいますわ」

黒尽くめの女――ミランダの提案に、リースは無言で肯定した。落ち着きを取り戻しつつあるのか、ナナリーがさり気なくリースの傍までやってきて声を潜めて問いかけてきた。

「リース、マザーからなにか聞いている？」

「ううん、なにも」

それは本当のこと。この一週間、特に変わったことはなかった。先週も、今週も、一昨日も、昨日も、今朝も、昼も。強いてあげるなら今だ。今がまさに変だ。

「……そう、そうよね」

どこか力のない返事。リースはそれを黙ってみていることしか、出来なかった。

しばらく気まずい沈黙がつづく。あまりの居心地の悪さに、はやく戻ることを願う自分がいた。でも、孤児院が見えてくると、玄関先にたたずむ人物を見つけて、リースは眉間に皺を寄せた。

「マザー」

「ああ、みなさん！ お帰りなさい」

玄関先にマザー・アリアと数人の子供たちの姿があった。彼女はリースたちの姿を確認するなり、人懐こい顔をさらに綻ばせて彼女たちを迎えた。

「良かったわ。もしも、リースたちとすれ違ったらどうしようかと、心配していたところなのよ」

「ご心配なく、特徴は聞いておりましたので」

ミランダがとびきりの笑顔を浮かべる。それに満足したのか、マザーは二度ほど深く頷いて、それからリースへと視線を移した。

「ところで、リース。ミランダさんのお話は聞いたかしら？」

「……いえ、まだです」

「あら、そうなの？」

マザーの笑顔がわずかに曇る。

「マザー、それは、私のほうからご説明しますわ」

「ああ、そうなの。じゃあその荷物たちをキッチンに置いたら、リースはすぐに私の部屋へいらっしゃい。ナナリーはいつも通りに……」

「ちょ、ちよつと待ってください！」

ふいにマザーの言葉を制すように、ナナリーが声を上げた。

「私も一緒に連れて行ってください。一人は給仕する者がいても問題ないでしょう？」

「駄目よ」

冷たい声が街を反響する。ミランダさんだ。

「給仕なら他でもできるわ」

「別に話なんて聞かないわよ。ただ……リースはこれで結構、神経質で粘着質なのよ。他の人が気の利かない行動をとったらすぐに怒るんだから。私たちの友好関係に輝を淹れないでほしいわ」

その言葉に、リースは少し可笑しくなった。もちろん、リースは神経質でも粘着質でもないし、どちらかといえばガサツな方。これはナナリーなりの交渉術だ。

「だとしても、貴女ではなくてはいけない理由にはならないわ。それに貴女にはその大きな袋をキッチンまで運ぶ仕事があるでしょう。中身を腐らせちゃ駄目」

しかし、ミランダさんはやっぱりナナリーを招くつもりはないよ

うだ。

そう言って彼女はリースたちが抱えている紙袋を指差した。ずっと勝ち誇った笑みを湛えていたナナリーが、初めて忌々しそうに玉葱やらニンジンやら入った袋を見た。

「ナナリー、ありがとう。私はひとりでも平気だから」

そう言ってリースは、ナナリーに紙袋を渡した。彼女はしばらく私をみつめると、しぶしぶと言った感じで紙袋を受け取った。

「……ミランダは、大聖堂の使者じゃない」

手渡すときに、ナナリーのささやきが聴こえた。思わず彼女を見ると、その瞳は明らかに強く、青い。リースはナナリーに辛うじて分かる程度に首を振ると、身を翻した。

そのあと、リースはこの三年間ですっかり見なれた孤児院を、ミランダさんとともに進んだ。孤児院『アリアの家』は、街でもそれなりに歴史と格式のある孤児院だ。装飾は古く素朴な印象を受けるけれど、造りは割りと頑丈で、落ち着きのある内装は窓の外の雪景色とよく似合っていた。

玄関から入ってすぐは礼拝堂になっており、囲うように左右から奥へ通路が延びている。右の通路から寮棟の階段を登る。三階のもっとも奥の部屋が院長室で、扉を開けるとカモミールの香が彼女を包んだ。

「ようこそ、お待ちしておりました」

部屋にはすでに顔見知りの給仕の方がいて、準備を整えて待っていた。ほんの一週間前にこちらに配属された人で、どこか素っ気ない印象を受けるけど、仕事は丁寧でとても優しい。リースも何度か話したことがあり、それなりに仲が良かった。

「こんにちは」

「お掛けください」

挨拶をすると、素っ気ない返事。この人らしい、とリースはかすかに笑みをこぼす。

先に席に着いていたミランダさんは、皮製の鞆から数枚の書類を取り出すと、リースに良く見えるように広げはじめた。その仕草は流れるように早く、どこか事務的だった。

「リースさんは、たしか今年の春ごろに孤児優遇制度の申し込みをなさいましたね？」

それはリースも知っている話だった。

「あ、はい、大聖堂の下位修道女を希望しています」

「どうして希望をなさったのですか？」

「……聖職に就いた以上、私は恵まれた環境で神様について勉強し

たいと思いました。大聖堂では信仰深い仲間たちに恵まれた環境があると聞きまして、また良い修道女になることが孤児院の仲間たちやマザーへのご恩返しになるかとも思いました。希望させていただけでした」

「勉強熱心ですね、オリガ様もきつと喜ぶでしょう」

「いえ、私などまだまだ未熟者です」

事前に用意されてあった台本の言葉を伝える。彼女は求めた答えを貰えて嬉しいのか、それともリースの謙遜に好印象を抱いたのか、にこりと笑った。

「孤児優遇制度とは、数多くある奨学金制度の一つです。幼いころに子供を亡くした十八歳未満の信者を対象に、オルティア教の庇護を受けることができます。まず首都にある大聖堂に迎えられ、恵まれた環境のもとで神学校の教育を受けていただきます。そのころから希望すれば布教活動などに参加でき、安定した収入が得られます。卒業しても、大聖堂に留まることができます。あなたにとっても素晴らしい話でしょう」

彼女が一枚の紙をリースに差し出す。手触りの良い紙にはたしかに「孤児優遇制度」とあった。

「私たちオルティア教本部は、マザー・アリアの報告により貴女の日々の行いを見てきました。貴女は幼いころに子供を亡くしていますね、とても悲しいことです。しかし貴女はそのことを苦に思わず、強く美しく成長なさいました。素晴らしいことです。私たちは貴女の日々の行いを称え、ぜひとも孤児優遇制度を貴女に受けていただきたいと思っています」

感嘆の声がその場の全員から漏れた。どこか無頓着なリースですら、思わず眼が眩んでしまった。

「……そんな名誉なものを、私なんかの良いのですか？」

「先程も言いましたが、私たちは適当に選んだわけでは決してありません。マザー・アリアの推薦、幾重の審査を繰り返し、貴女の日々の行いをみて、貴女にこそ相応しいと思ったからこそ選んだので

す。どうか自信を持ってください」

たしかにそうだ。孤児優遇制度は親のいない子供たちからしてみれば夢のような話。迎えられる大聖堂は、さしずめシンデレラの王子様の城といったところだ。

当然のように、希望者は星の数のように多く、枠は片手で数えるほどしかない。そのなかから、待遇を受けるに値する人間。また、多大な待遇を受けて自惚れたり自堕落になったりしない人間を掻き分けながら選別するとなると、かなり骨の折れる作業になるのではないか。

そう思うと、リースは誇らしい気持ちになった。

「リース・キャロルさん。ぜひとも、我が大聖堂に来てください」
それで迷いは吹っ切れた。

リースは「はい」とうなずこうとした。そのとき。

――ミランダは教会の使者ではない。

忘れてかけていたナナリーの言葉が、リースの胸に一抹の不安を与えた。

何かがおかしい。リースは直感的に思った。

たしかにリースは勤勉で信仰深いが、これはほかの信者と大して変わらない。ある一点を除いて、特別な才能に恵まれているわけでも、過去に素晴らしい実績を収めたわけでもない。

もしかしたらナナリーの言動で疑い深くなっているのかもしれない。だからこそ、リースは「考えさせてください」と言い、硬く碧の瞳を閉じた。

正しい情報と曖昧な情報とを整理し、偏見を取り除き、広く深い視点で物事をみるように心がける。その作業をする姿を見たナナリーは「まるで裁判官のようね」と言った。そんな素晴らしいものじゃないと照れながら、一瞬でも浮かれていた自分を冷静にさせてくれた彼女に感謝する。

ふたたび眼を開けたとき、答えは決まっていた。

「私は、受けません」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6487v/>

Silent God

2011年10月10日03時26分発行